開拓先人への思い忘れず＝ア・マッシャード＝**87**回目の招魂祭＝５百人が冥福祈る＝サンパウロ市からも貸切バスで

２００７年7月１３日付け

今年も招魂祭晴れ――。八十七年間、祭礼時には一度も雨が降ったことがないというアルバレス・マッシャードの招魂祭が八日午前九時から、七百八十四人が眠る同日本人墓地で行なわれた。招魂祭は今年で八十七回目、同地は入植開始から九十年を迎える。西林万寿夫在聖総領事夫妻、勝谷ルイス同市市長、汎ソロカバナ日伯連合文化協会の纐纈俊夫会長を始め、ソロカバナ沿線日系団体関係者ら、約五百人が先亡者の冥福を祈った。サンパウロ州政府教育局による日本文化教育プログラム「ヴィヴァ·ジャポン」に参加している州立校の生徒たちも出席、コロニアのみならず、日本移民の足跡を将来に残す地元の意思を強く感じさせる式典となった。

「三歳だった弟が埋（い）かっとる」

毎年欠かさず招魂祭に出席しているという青柳真蔵さん（７９）は、年子の弟ヨシユキさんが亡くなった日、雨が強く降っていたことを覚えている。

「あの頃はファルマシアもなかったからね」。そう入植当時を振り返った。

州の文化財に指定されている同地の日本人墓地は、七百八十四人（うちブラジル人一人）が埋葬されている。星名謙一郎が二千アルケールの旧ブレジョン移住地を売り出したことから同地の開拓の歴史が始まった。

「日本人墓地」と日本語で書かれた墓地の入り口の門には、一九一八年から四三年四月と書かれているが、入植が開始された一七年に亡くなった移住者の墓もある。

墓地のなかった初年、近郊のインジアナに埋葬したものを小笠原尚衛の登記により、埋葬が可能になった現在の墓地へ戻したものだという。

それを除けば、初めての埋葬者となったのは、二歳で亡くなった渡辺浅江ちゃんの墓。他の移住地同様、初期開拓の犠牲者の多くは幼い子供たちであった。

午前九時から始まった慰霊祭は、小梅川登志雄さんが司会、プ・プルデンテ西本願寺の堅田玄悠主管が導師を務め、子供たちが献花、献灯を行なった。

日語学校書記の小梅川寿男さん、汎ソロカバナ文協の纐纈会長らが移住地の歴史を振り返り、追悼の辞を述べた。

西林総領事は、「開拓者が血と汗と涙を流したこの地を訪れることができ、感慨深い」と率直な気持ちを述べ、「幼い子供たちの墓標を目の前にし、親の無念さに思いを馳せた。冥福を祈りたい」と続け、墓地を維持、管理してきた先人に対し、敬意を表した。

□□□